

栽培漁業技術総合開発研究事業－Ⅲ：ヨシエビ

中西尚文・丸山拓也・岩出将英

目的

本県の主要な栽培漁業対象種であるヨシエビについて、放流効果の把握と放流効果向上に係る知見の収集を目的とする。昨年度までに、放流適地の検討に資する結果は得られたが、放流サイズに施し漁獲加入まで追跡できる尾肢切除標識を見いだすことはできなかった。

当事業のヨシエビは今年度が最終年度であるため、漁獲物組成や漁獲量などの情報をまとめ、課題を整理する。

方法

1. 市場調査

2010年5月から12月に、伊勢湾漁協有滝支所所属の小型機船底曳き網（まめ板）で漁獲されたヨシエビの体長・性別を把握した。

2. 漁獲量・放流量調査

1992年から2009年までの漁獲量・放流量を把握した。漁獲量は、近年まで継続して把握できる産地市場別漁獲量について漁協調べデータを整理した。放流量は水産庁等による「栽培漁業種苗生産、入手・放流実績(全国)」を用い、一部重複が見られたので修正し整理した。

結果および考察

1. 市場調査

体長組成の推移を図1に示す。1996・1997年度には鈴鹿市漁協や四日市市漁協の漁獲物が調査され、初夏・秋・冬の最小サイズはそれぞれ全長5cm・全長4cm・体長3cmであった。伊勢湾に産卵期は7～9月頃で、冬季の低水温期にはほとんど成長しないとされている。これらのことから漁場や漁具に違いがあるものの、10月に漁獲加入したヨシエビは、前年の晩期に発生した1歳群が比較的早期に発生した0歳あるいはその混合群と考えられる。

2. 漁獲量・放流量調査

漁獲量と放流量の推移を図2に示す。放流増加に伴い漁獲量の増加が見られたが、2006年から漁獲量が減少している。なお漁獲量が減少に転じた時期とその後の傾向は愛知県の伊勢・三河湾でも同様である（原田私信）。伊勢湾水産連絡協議会の報告(1997)では香良洲漁協の漁獲量も示されているが、近年は漁獲も少なく、すべて卸売市場へ出荷するため、漁獲量の把握が不可能である。ただし図からも分かるように、県内では磯津地区の漁獲

量が最も多いことから、漁獲量の傾向に関していえば、特に磯津地区を継続して把握することが重要である。

なお漁獲量は操業隻数にも関係する。漁業者の減少に伴い操業隻数も減少し、磯津地区では1998年頃に比べ2009年は3隻減り、11隻が底曳網を操業している状況である。

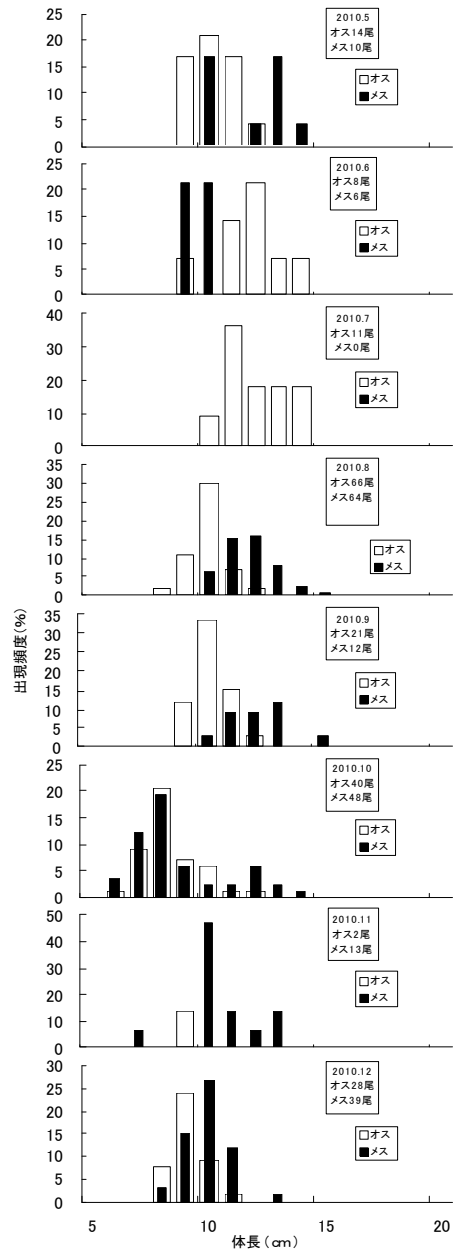


図1. 小型機船底曳き網(まめ板)で漁獲されたヨシエビの体長組成(伊勢湾漁協有滝支所)

課題

三重県では近年、クルマエビより放流尾数が増えている。しかし漁業者や漁獲量が減少した地区ほど、産地市場（セリ）でまとまった量が取り扱われなくなり、相対取引や卸売市場への出荷が増えるため、漁獲実態の全容把握は困難であると考えられる。また他の栽培漁業対象種と比べて、漁獲加入時期や寿命など、生活史に係るデータが少ないことも否めない。

栽培漁業でより効果を示すには、健苗を最適な場所に放流するだけでなく、漁獲の実態や生態の把握が必須であることから、課題を以下のとおり整理する。

- 1) 漁獲量と操業隻数など漁獲実態をモニタリングできる体制を整備する。
- 2) 天然稚エビの生息地や成長、漁獲加入など生活史にかかる知見を収集する。

参考

三重県水産技術センター（1997）：平成8年度三重県水産技術センター事業報告，188-193

三重県水産技術センター（1998）：平成9年度三重県水産技術センター事業報告，169-170

伊勢湾水産連絡協議会・三重県津農林水産事務所(1997)
：若い力(伊勢湾水産連絡協議会結果資料)，1-4

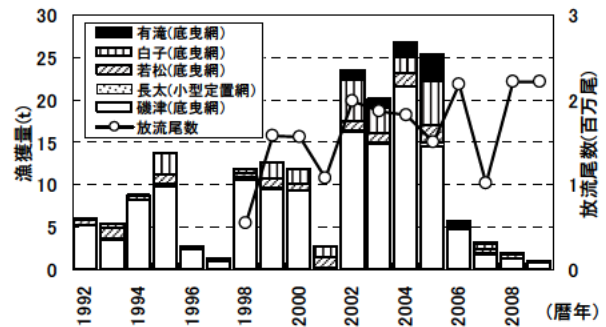


図2. 漁獲量・放流量の推移

2001年：磯津のデータなし

2009年：有滝と磯津のみ